

自分の意志でやるから面白い。 6年目の目標は「甲子園」!

青島健太が語る

応援！ 学校の感動印 第31回



目白研心中学校・高等学校 野球部
Mejiro Kenshin Junior and Senior High School

高校の野球部とは、果たして何のためにあるのか。甲子園を目指す球児たちに野球に打ち込む場を提供して、彼らの活躍を通して学校の存在や名前を知ってもらおう。これも立派な活動の理由だ。野球部の快進撃が学校全体に活気を与え、多くの入学希望者を募らせる。野球部にとっても学校にとっても理想的な形だ。

では、野球部が強くなければそうしたことはかなわないのか。野球部が他の学生たちに良い影響をもたらすことはないのか。野球部に問われているのは、試合に勝つこと、グラウンドではつらつとプレーすることだけなのだろうか。

東京・新宿区・中落合。閑静な住宅街にゆったりとした坂が伸びる。「五の坂」「六の坂」どの坂を上ってもその道は学校につながる。それは、この学校の持つ多様性と自由を象徴するアプローチのようにも思えた。そこに興味や課題があれば、どこから上ってもいい……。目白研心中学校・高等学校が共学になったのは2009年からだ。高校の野球部がスタートしたのもこの年からになる。社会科の教諭であり野球部の監督を務める鈴木淳史先生は、当時を振り返って笑う。

「その頃は、野球部員が2人しかいなかったんです(笑)。夏の大会が近づいて弓道部や剣道部に頭を下げて、8人までは何とか集まったんですが、9人目がいなくて。パソコン部に中学で野球をやっていた子がいると聞いて、2人の野球部員と一緒に試合だけでいいから出てくれないかと頼んだんです。『いいです』って返事はもらったんですが、試合が日曜日だったら行けませんと言われて(笑)」

このままでは野球部が消滅してしまう。危機感を覚えた鈴木先生は、高校野球連盟届け出のもと、中学生を対象にした体験練習会を開催して部員たちを集めることにした。そのかいあって3年生が引退した今でも、2年生25人、1年生22人と活気のある野球部になっている。

とは言え、目白研心の野球環境はお世辞にも良いとは言えない。学校で使えるのは約50メートル四方のグラウンドと体育館。それもサッカー部や他の部との併用だ。グラウンドが使えない日は、都内の野球場を転々としている。しかし、こうした環境こそ部員たちを鍛えるには絶好のものだと鈴木先生は言う。

「学校から球場への移動は、ものすごく体力を使うので、タフさも養われる。また練習時間が短いので『時計の使い方』がうまくなっています。『時計の使い方』というのは、他のチームが一日かけてやる練習をわれわれは1時間半とか2時間でやらなければいけないので、リズムを上げて、質の良い練習をやるという事です。電車に乗るときも全員が各車両に分かれて乗る。1つの車両に固まると他の乗客の迷惑になります。状況に応じていろいろなことを判断する。こうしたことも、プレーに生きてくると思っています」

鈴木先生は、勉強やあいさつ、学校外での生活態度にも厳しく注文を付けている。その理由をこう説明する。

「うちの野球部は、毎朝行われるテストの点が悪いと練習に参加できないルールになっています。授業が終わったらできなかったテストの復習をする。だから練習に参加するために勉強も必死になってやる。学校生活や勉強





をしつかりやると褒められる。褒められるとうれしいからまたがんばる。結果的に自分が良い方向に向かっていく。生徒を指導する場合は、グラウンドだけでは狭すぎる。学校、家庭、勉強、そうしたもののすべてが僕の中では高校野球だと考えています。だから勉強も学校生活もすべて野球につながってくるんだよ……と彼らには話しています」

さまざまなことに関心を配ることを求められている部員たちは、どんな思いで取り組んでいるのだろうか。

主将の山口雄大君(2年一塁手)。「鈴木先生がおっしゃる通りあいさつとか声を出すことが大事だと思っています。普段から声を出していれば試合中に声が止まることがない。校庭が狭いのはデメリットもあるんですが、他の高校より良い球場で練習ができるというのもあるので、その場に応じて臨機応変に対応することが身に付いていると思います。学校の勉強が野球につながるか? ぼ

くは勉強がすごく苦手なので、その点はすごいプレッシャーです(笑)」

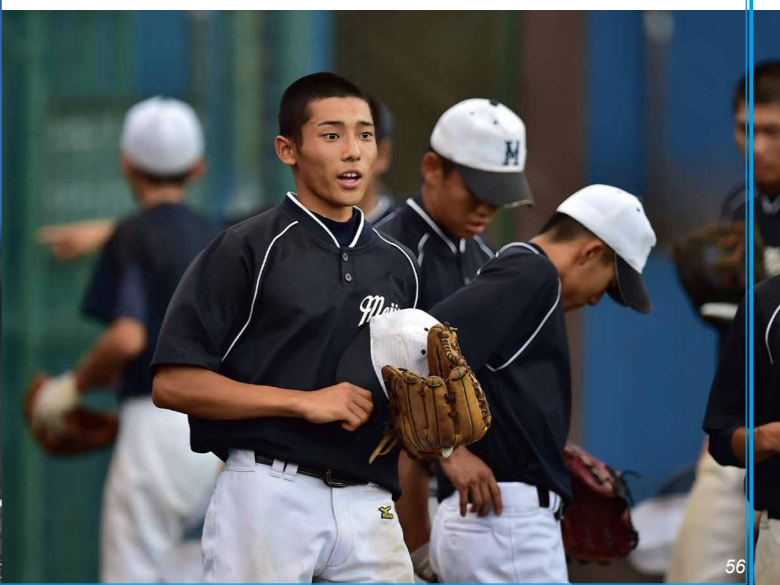
副将の菅野海都君(2年左翼手)。「狭いスペースでも質の高い練習をしようという気持ちでやっています。練習の内容も、キャプテンと副将に任されているところもあるので責任を感じます。夏の大会もたくさん先生方が応援に来てくださったりして、改めていろいろな人たちに支えられて野球ができるんだと思うと、先生方の授業もしっかり聞かなければと思いました」

勉強も野球につながる!? 鈴木先生の期待と部員たちの感覚には若干のズレがあるようですが、気にするレベルではない(笑)

野球以外にも持ち前のリーダーシップを発揮しているのは、同じく副将の村岡昂哉君(2年一塁手)だ。「1年生の前期から、ずっとクラス委員(学級委員)をやっています。野球部のヤツってリーダーシップ持っているヤツが多くて、み

んな各クラスを引っ張っている。クラスでやっていることも野球部をまとめることに活かせると思うし、私生活が乱れるとプレーも乱れると思うので、そこは大事にしています。夏までは4番を打っていたんですが、夏休みに足を肉離れして、試合に出られなくなりました。足は治ったんですが、今度は打撃の調子が悪くて試合に出られなくて……(笑)」

チームのムードメーカーは、川内武蔵(2年投手)だ。「クラスでもリーダーであることを意識しています。勉強は、社会と国語と英語が得意です。ダルビッシュの投球も録画して勉強しています。監督には、社会に出たときの基本をたくさん教わっています。将来はアメリカでスポーツに関係する仕事をやりたいです。も



ちろんその前にプロの選手になりたいですが……」

みんな素直でクラスでの活動にも一生懸命だ。そんな野球部の姿勢に松下秀房校長、長谷良一教頭、吉田直子教頭も感心している。そうなるに次なる期待は、甲子園出場か。率直に鈴木先生に尋ねてみた。

「この学校で教えるのは6年目なんですけど、過去5年間、一回も甲子園という言葉を使ったことがないんです。今年の新しいチームが始まったときに、何を目標にやっていくって聞いたんです。そうしたら、彼らが『甲子園』と言った。だからこのチームは甲子園を目指しています……という感じです。監督が『おい、甲子園行くぞ』あ、はい『みたいなのがすごく嫌で、まず自分たちで『甲子園』って言い出すまで待っていたというか、そういう風にしていかなければダメだと思っていました。今年の子は『甲子園』という言葉で自分たちで使うようになったので、いよいよこの野球部も本気になってきた……と感じています」

鈴木先生が『甲子園』を簡単に口にしないのには理由がある。彼自身が新潟明訓高校時代に甲子園を経験しているからだ。目指すからにはそれなりの覚悟がいる。東都大学リーグ、中央大学野球部でも活躍した鈴木先生は、高いレベルの野球をとことんやってきた。それは、やらされる野球ではなく、自らの力でうまくこなそうとする野球。鈴木先生は、機が熟すのを待っていたのだ。

「自分で自分のことを伸ばしていく。その楽しさを彼らにも実感してほしい。僕も高校時代に野球と勉強で自分が伸びる楽しさを教

わった。その実感が、もっと野球をやりたい、指導者になりたい、というような気持ちにながっていく。自分で考えて、自分で伸びていく。その手伝いができればいいなと思っています」

勉強と野球の両立。それは野球部員たちにとって義務ではなくて特権だ。その両方にしっかりと取り組める環境がこの学校にある。校名の通り、心を研いで体を鍛える。そして忘れてはいけないあいさつや礼儀、気配りといった日本的な価値観もこのクラブでは大切になっている。和風な味付けで、目の前のごちそう(野球と学校生活)をとことん楽しむ白研心の野球部。

取材の帰り道、五の坂を下りながら川内武蔵(ナルド君)の話がふと頭に浮かんで楽しくなった。「大好きな食べ物、塩で食べるステーキです」

この野球部は、まさにそんな感じである。

青島健太
スポーツライター・キャスター

1958年4月7日、新潟県新潟市生まれ。春日部高一慶応大→東芝と進み、1985年、ヤクルトスワローズに入団。5年間のプロ野球生活引退後のオフ、半年間の研修の後オーストラリアへ日本語教師として渡り、厳しいプロ野球生活で忘れかけていたスポーツをする喜びや楽しみ方を思い出し、その素晴らしさの伝え手となることを決意し帰国。スポーツライターとして新しい道を歩き始める。現在はあらゆるメディアを通してスポーツの醍醐味を伝えている。鹿屋体育大学、流通経済大学、日本医療科学大学客員教授。